

## 21 もくぞう あみだ によらいおよ しょうきょう じりゅうぞう 木造阿弥陀如来及び両脇侍立像



指 定 県 宝 平成 6 年 8 月 15 日  
 所在地 安 原 寺  
 所有者 安 養 寺



安養寺の阿弥陀三尊は、類例の少ない中品中生の説法印を結ぶ弥陀に両脇侍を配したもので、鎌倉中期の作とみられる。

中尊の阿弥陀如来の構造は、ひのみ 檜材を用い、うちく 頭体幹部を通じ正中線、かんにゆう 両耳後ろを通る体側で左右前後四材をは 矧ぎ合わせて彫成し、うちく 内剝りを施し玉眼を嵌入、割首を行っているものと推定される。

両脇侍立像の像容はほぼ同じで、観音菩薩は裳の折り返しを二段とし、腰布の正面は裳の折り返し部に隠されている。両手は第一・三・四指を曲げ、他指を伸ばして、左手を垂下、右手は屈臂し肩先まで挙げ蓮華（亡失）を執る姿態を示す。

勢至菩薩は裳の折り返しを一段とし、腰布を大腿部中央で結び紐二条・連珠・紐二条からなる腰帯を正面にのぞかせる。両腕は観音菩薩同様、右手は第一・三・四指を曲げ、他の二指を伸ばし、屈臂して肩先まであげ、蓮華（亡失）を執る姿態を示す。左手は五指を軽く握り垂下させる。右手は臂先から遊離し別に保管されている。

その作風や頭体の主要部を四材からつくり、上げ底式に剝り残す技法も運慶の流れをくむ慶派一門に近い仏師の作と推定され、県内では数少ない当代慶派の秀作として注目される。

物件概要	製作年代	13世紀前半
	材 質	檜材
	構 造	寄木造・玉眼嵌入・漆箔・説法印
	法量像高	中尊像 68.7cm 脇侍像 各83.4cm